（様式２）報告書

# 令和５年度　小中一貫教育校報告書　戸山小中一貫教育校

## １　学校の課題

〇教職員は、本校に着任してから、小中一貫教育の体制や取組を理解することになる。小中一貫教育の取組を継続的に行っていくためには、教職員は系統性を見通した授業づくりを行い、児童生徒の９年間の発達段階を意識した指導など、指導力を高めるための学校体制の構築が必要である。
〇通学区域外からの小中一貫教育校への募集により、特に中学校入学段階で他学区からの生徒が増加している。そのため、どの学年から取り組んでも地域への愛着と貢献の意欲をもつ児童生徒を育成できるよう、小中一貫教科であるふるさと科を充実させる必要がある。

## ２　研究主題

誰一人取り残すことのない義務教育９年間の教育課程の編成とその指導・支援を支える学校体制の構築（２年次）

## ３　取組内容

### ⑴　９年間一貫した教育を施すための授業改善に向けた体制作り

- 小中の教職員が小グループ編成して行う研修を「戸山パラーレ」として授業改善の研修を実施。※１
- 「①他の教員を参観して学んでいきたい事」と「②授業の中で児童・生徒をつなぐための工夫」の２つの視点で各自目標を立て、教員一人一人が自身の授業を改善する取組を行う。定期的に、自分の授業を振り返り、全教員共有のスプレッドシートに振り返りの内容を記入する。※２
- 年に数回、教員が個別で授業を見合い、協議を行う強化月間を設定する。

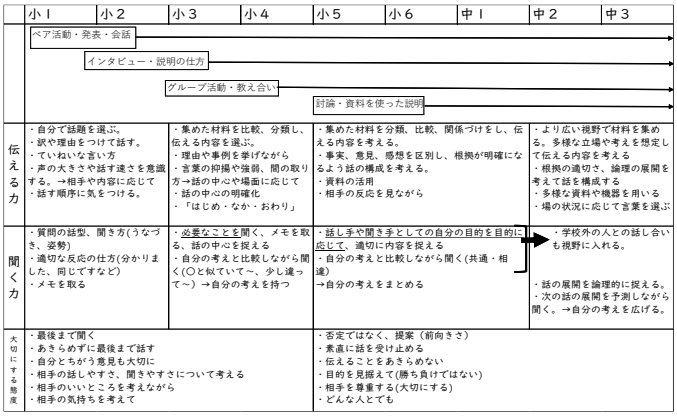
※１　戸山パラーレ

| | 『学びあい』に向けて自分がこれからすること | 振り返り　６月 | 強化月間６・７月 |
|---|---|---|---|
| | ①他の教員を参観して学んでいきたい事<br>②授業の中で児童・生徒同士をつなぐためにしていきたい事 | | |
| 教員名 | ①子どもの興味を惹く授業の組み立て方や展開の工夫の仕方<br>②話し合う課題を明確にしてペア・グループ学習を取り入れる | ①A 先生の国語の授業では、導入からまとめまでいくつも仕掛けがあり、子どもたちも夢中になって授業に参加していた。事前の準備や子どもの「分かる・できる」を引き出せるような工夫が必要であると感じた。<br>②指示が明確でなく、子どもの活動が止まってしまう場面も見られたため、活動の目的や意図を明確にし、話し合いの３つのルールを意識させることに注意して授業づくりを進めていきたい。 | ①他の先生方の授業を参観することが難しかったため、９月以降は回数を増やしたい。<br>②ペアやグループになって話し合う時間は何度も設けたが、常に話し合いの３つのルールを意識しながら話し合い活動を進めることができていなかった。 |

※２　スプレッドシートによる振り返り（一部抜粋）

## ⑵　地域人材・教材を活用した「ふるさと科」の充実

- 「ふるさと科」を通して９年間で育成すべき資質能力を明確にした年間計画を作成する。※３
- 地域の題材を各学年探究課題の柱とし、地域人材を活用した取組を行う。※４
- 各学年「ふるさと科シート」を年度末に見直し、新年度へ向けて計画を立てる。※５は別紙参照
- ICT を活用し、小中一貫教育校同士の児童生徒と交流を行う。※６
- 大学教員に、専門的な立場から各学年のふるさと科のカリキュラムを分析していただく。※７
- 地域とともにある学校づくりとして、学校運営協議会を積極的に活用する。「ふるさと科」の集大成として、中学３年生が「地域と生きる、地域に返す」をテーマとして課題設定し、具体化したアイデアについて、学校運営協議会で意見をいただく。※８



| | 小１ | 小２ | 小３ | 小４ | 小５ | 小６ | 中１ | 中２ | 中３ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ペア活動・発表・会話 → | | | | | | | | |
| | | インタビュー・説明の仕方 → | | | | | | | |
| | | | グループ活動・教え合い → | | | | | | |
| | | | | | 討論・資料を使った説明 → | | | | |
| 伝える力 | ・自分で話題を選ぶ。<br>・訳や理由をつけて話す。<br>・ていねいな言い方<br>・声の大きさや話す速さを意識する。→相手や内容に応じて<br>・話す順序に気をつける。 | | ・集めた材料を比較、分類し、伝える内容を選ぶ。<br>・理由や事例を挙げながら<br>・言葉の抑揚や強弱、間の取り方→話の中心や場面に応じて<br>・話の中心の明確化<br>・「はじめ・なか・おわり」 | | ・集めた材料を分類、比較、関係づけをし、伝える内容を考える。<br>・事実、意見、感想を区別し、根拠が明確になるよう話の構成を考える。<br>・資料の活用<br>・相手の反応を見ながら | | | ・より広い視野で材料を集める。多様な立場や考えを想定して伝える内容を考える<br>・根拠の適切さ、論理の展開を考えて話を構成する<br>・多様な資料や機器を用いる<br>・場の状況に応じて言葉を選ぶ | |
| 聞く力 | ・質問の話型、聞き方(うなづき、姿勢)<br>・適切な反応の仕方(分かりました、同じですなど)<br>・メモを取る | | ・必要なことを聞く、メモを取る、話の中心を捉える<br>・自分の考えと比較しながら聞く(○と似ていて～、少し違って～）→自分の考えを持つ | | ・話し手や聞き手としての自分の目的を目的に応じて、適切に内容を捉える<br>・自分の考えと比較しながら聞く(共通・相違)<br>→自分の考えをまとめる | | | ・学校外の人との話し合いも視野に入れる。<br>・話の展開を論理的に捉える。<br>・次の話の展開を予測しながら聞く。→自分の考えを広げる。 | |
| 大切にする態度 | ・最後まで聞く<br>・あきらめずに最後まで話す<br>・自分とちがう意見も大切に<br>・相手の話しやすさ、聞きやすさについて考える<br>・相手のいいところを考えながら<br>・相手の気持ちを考えて | | | | ・否定ではなく、提案（前向きさ）<br>・素直に話を受け止める<br>・伝えることをあきらめない<br>・目的を見据えて(勝ち負けではない)<br>・相手を尊重する(大切にする)<br>・どんな人とでも | | | | |

※３　目指す資質能力

ふるさと科　課題の柱

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 前期<br>ブロック<br>小1234年 | 地域の中で学ぶ<br>地域について知る | 小1<br>学校探検<br>戸山の四季<br>いもほり<br>むかしあそび | 小2<br>まちたんけん | 小3<br>吉山川<br>（戸山の自然） | 小4<br>阿刀神楽<br>（戸山の文化） |
| 中期<br>ブロック<br>小５６<br>中１年 | 地域のために考える | 小5<br>米作り | 小6<br>戸山<br>プロジェクト | 中1<br>戸山探検 | |
| 後期<br>ブロック<br>中２３年 | 地域と共に生きる | 中2<br>職場体験 | 中3<br>地域と生きる | | |

※４　各学年探究課題

※４　地域の方が Teacher

※６　遠隔授業

※７　島根大学
中村准教授による遠隔研修

※８　学校運営協議会

## ４　検証結果

⑴　９年間一貫した教育を施すための授業改善に向けた体制作り

○　校内での「学習スタンダードアンケート」より一部抜粋

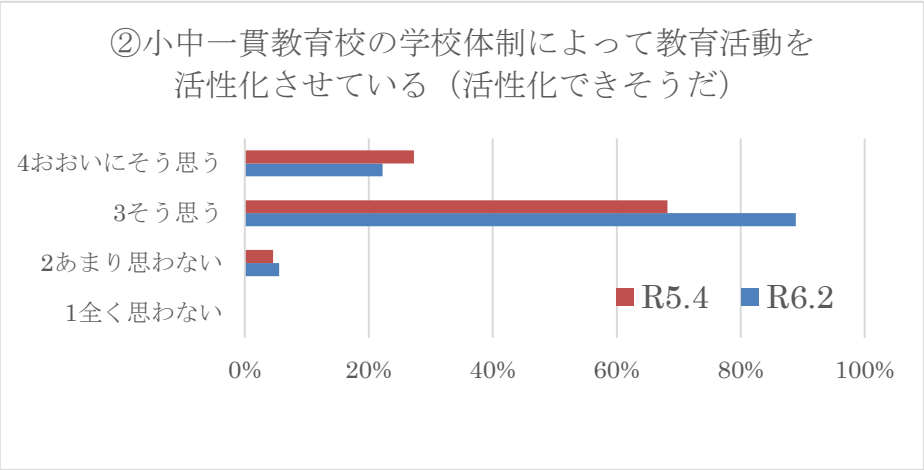
| 《児童生徒》 | ５月 | ９月 | １１月 |
|---|---|---|---|
| 「めあて」を理解して授業に取り組んでいる。 | ７８％ | ８９％ | ９０％ |
| 授業でグループになったとき、積極的に友達の意見を聞き、自分の意見も言っている。 | ８０％ | ８１％ | ８６％ |
| 「ふるさと科」の学習を通して地域や社会、自分について考えることができた。 | ８３％ | ８４％ | ９０％ |

《児童生徒》
○３項目ともに肯定的評価の割合が上昇した。

| 《教員》 | ５月 | ９月 | １１月 |
|---|---|---|---|
| 目指す活動のゴールの姿・ゴールまでの道筋・時間配分を意識して授業をしている。 | ９１％ | ９５％ | １００％ |
| 積極的にグループ活動を取り入れている。 | ７４％ | ７５％ | ６５％ |
| （前期ブロック）地域のことを知らせることができた。<br>（中・後期ブロック）「ふるさと科」の学習を通して地域や社会、自分について考えさせることができた。 | ５３％ | ６０％ | ８２％ |

《教員》
○学習のグループ活動についての項目の割合が低くなっている。
○地域についての肯定的評価の割合が上昇した。

○　「令和５年度　小中一貫教育校　教職員アンケート」より

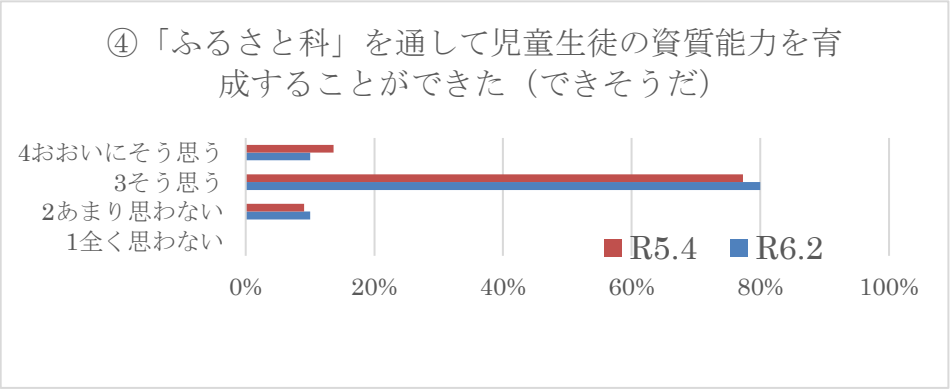



《教員》
○肯定的評価の割合が年間を通じて90％以上を維持している。

○　「戸山パラーレ」による振り返り《教員》

- 学力テストの結果においては、やはり日頃の授業の延長線上にあるものだと思うので、自分の授業力アップのため、改めて他の先生たちの授業を観ることが大切だと感じた。
- 個の学習の時には気持ちが向かなかった生徒が、ペア学習では参加せざる得なくなり学習に主体的に取り組めるようになった姿がよく見られた。
- 次年度は、９年間の見通しをもつために、「教科」ではなく「ふるさと科」を軸にしてお互いの授業を参観してみてはどうか。

⑵　地域人材・教材を活用した「ふるさと科」の充実

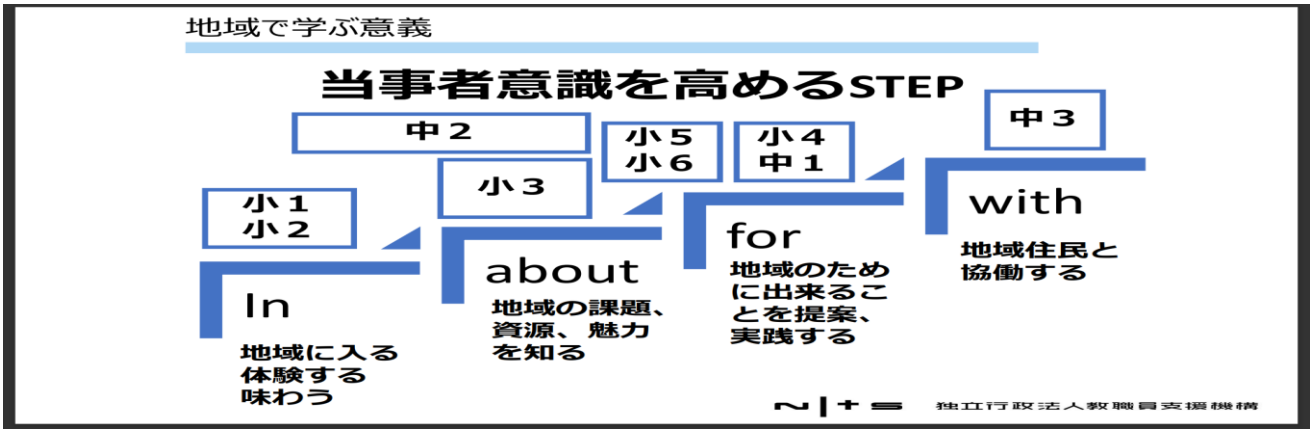



○　単元末に行う「ふるさと科　ふり返りシート」より〈小学校〉《児童生徒》
- 阿戸の町たんけんで、自分が知らなかったことを知ることができて楽しかったです。（小２）
- 吉山川が太田川につながっていることを知りびっくりしました。地域の方から「ホタルがへっている。」と聞いてホタルを大切にしたいなと思いました。（小３）
- 初めて田植えや稲刈りをしてみて、米作りの大変さや達成感などを実際に自分の身で感じることができたので、とてもうれしかったです。（小５）

○　単元末に行う「ふるさと科　ふり返りシート」より〈中学校〉《児童生徒》
- 戸山は山が近く土砂災害が起こりやすいことがわかり、そのための治山堰堤や法枠工などを学んだ。もっと防災への意識を強め、防災バックの準備や避難所の場所の確認をしようと思いました。また、他の災害についても調べ、自分にできることを考えようと思いました。（中１）
- 「働く」というのは、お金を稼ぐためにすることでなく、社会（地域）とのつながりを持ち、自分の生きがいのためにしていることだとわかった。（中２）
- 戸山のことを調べる中で、今までは戸山の良さについて抽象的な良さしか知らなかったが、今ではその良さを支えている人や、その背景についてさらに知ることができた。（中３）

○　とやまっ子文化祭アンケートより《参観者》
- 母校の歴史を知った興味深い発表でした。母校について知ることで、より誇りに思い、大切な時間を過ごせる発表だったと思います。
- 自分たちの学校の魅力を知ったり、小中一貫の良さも説明されたりと興味深い発表を聞き、より好きになれてうれしいと思いました。
- 子ども達から防災を発信することは、意義のあることだと思います。
- 職場体験で、仕事を体験しただけでなく、自分達の課題をみつけた皆さんを応援しています。
- 結果分析、課題提起がしっかりしていて、解決方法まで考えられ素晴らしいと思います。

○　中村准教授によるカリキュラム分析
- 本校のふるさと科のカリキュラムについて、各学年の取組を「In（地域に入る、体験する、味わう）」「about（地域の課題、資源、魅力を知る）」「for（地域のために出来ることを提案、実践する）」「with（地域住民と協働する）」という４つのステップに位置づけてもらうことができた。




＜島根大学　中村准教授のスライド資料より＞

## ５　研究成果

検証結果より、次の点が研究成果として挙げられる。

⑴　９年間一貫した教育を施すための授業改善に向けた体制作り

・　児童生徒による、学習スタンダードアンケートの「授業でグループになったとき、積極的に友達の意見を聞き、自分の意見も言っている」という項目において、年間を通して肯定的な意見が６％増加していた。このことから、他の教員の授業を参観して自分の授業を振り返ったり、戸山パラーレで授業改善について話し合ったりしたことが、授業の充実につながったと考えられる。

・　教員は、戸山パラーレ実施の際に明確にした視点について、①中学校、小学校の授業を両方参観し、小学校の授業では丁寧な板書や説明、授業展開の工夫が参考になった。②話し合い活動に入る前に、活動の目的や意図を明確にすることで子どもたちがスムーズに話し合いを進めることができていた。という振り返りがあった。一方で、「積極的にグループ活動を取り入れている」という教員アンケートの項目は９月と１１月を比べると、肯定的な数値が１０％下がっている。しかし、児童生徒の肯定的な数値は５％上昇していることから、個々の教員が自らの授業を見直し、目的や意図を持たせた活動となるよう改善に取り組んだと考えられる。

・　授業改善に向けた体制がつくられ、グループ学習による「学びあい」を通して、基礎的な学力の向上につながった中学３年生の事例を今後の授業改善に生かしてしいきたい。

⑵　地域人材・教材を活用した「ふるさと科」の充実

・　地域の題材を課題の柱とすることで、中学３年生の「地域と生きる、地域に返す」というテーマに向けてつながりを持って取り組むことができた。学習スタンダードアンケートの「『ふるさと科』の学習を通して地域や社会、自分について考えることができた」という項目で、年間を通して肯定的な意見の割合が児童生徒（７％）・教員（２９％）増加していた。教員の増加率があがっていることは、昨年度から取り組んでいる「振り返りシート」や校内研修により教員の意識が高まっていることがわかる。

・　大学教員による専門的な立場からの分析により、各学年の取組が９年間の見通しをもった実践になっていることを確認し、地域で学ぶ意義を確認することができた。

・　遠隔授業を通して、自分たちのふるさとである戸山小中と似島小中、阿戸小中を比べて、それぞれの魅力や良さを知ることができた。特に中学１年生はふるさと科で自分たちが学んだ防災について、発信することができた。

・　「ふるさと科」の充実により、どの学年においても探究的な学習に主体的・協働的に取り組み、地域に積極的に参画しようとする姿が見られ、地域への愛着と貢献の意欲をもつ児童生徒の育成につながった。さらに充実した取組を目指していきたい。